

## 三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』

柴 山 幸 治

## 一

「近代経済学者のうちでマルクス経済学を最も良く理解している学者を若干名挙げよ」と問われたならば、ちゆうちよすることなく先づその著作 *An Essay on Marxian Economics* の末尾において、「経済学においておよそ何らかの進歩が望みうるとすれば、それはマルクスによつて提起された問題を説明するためにアカデミックな方法を利用することによつてでなければならぬ。」と述べたジョーン・ロビンソン (Joan Robinson) を思ひ出す人が多いことと思われる。その彼女が *The Accumulation of Capital* を世に問うと伝えられたとき、そのニュースが多くの関心と期待をもつてむかえられたこと

は、けだし当然の成り行きであつた。「アカデミックな方法を利用してマルクスが提起した問題を説明する」という彼女が発見した経済学の進歩の唯一の方向を彼女自身がどのように歩み進むかに人々は多大の興味をいだいたからであつた。

このように *The Accumulation of Capital* は多くの期待と關心のうちに発表された労作ではあつたが、大きな期待にこたへるに足るほどの成功作ではなかつたようである。期待が大きかつただけに、その期待を裏切られた失望感もまた一きわ大きかつた。たとえばラーナー (A. P. Lerner) は「本書のもつとも有益な部分をなしているものは、諸々の誤謬と、たくみにおこなわれている諸々の混同とであるようにわたくしにはみえる。これらの誤謬や混同の探求は大学院の学生たち(および教授た

ち)に最上の経済学演習をあたえることができる。」と酷評しているが、これなどは大きな期待を裏切られた失望のあまりぶちまけられた不満であるかも知れない。しかし三谷教授はもつと寛大であつて、「ロビンソンの理論は、近代経済学においていまだかつてなかつたような体系的な資本蓄積論である。それはかんたんな方法的批判だけではかたづけられることのできない豊富な理論的内容をもつているのである。」と高く評価される。筆者自身の意見をここで述べさせて頂くならば、筆者も決してロビンソンの *The Accumulation of Capital* を成功作とは考えていない。そして大きな期待をいだいていただけに人一倍大きな失望感をいだいた者の一人であるが、それにも拘らず、それは「近代経済学においていまだかつてなかつたような体系的な資本蓄積論である」との三谷教授の見解には賛成である。そもそも近代経済学には資本蓄積論なるものはなかつたといつても過言ではないのであつて、アカデミックな方法による資本蓄積論体系を構築したということだけでも——それが誤謬と混乱を含むものではあつても——高く評価するに値するものであると考える。

したがつてロビンソンの資本蓄積論を「方法的批判だけでか

三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』(柴山)

たづける」ことなく、その「豊富な理論的内容」を内在的研究(解釈と批判)された三谷教授の労作を高く評価するものである。

さてある理論体系を内在的に研究する方法として、次にのべるような2つのタイプを考へることができる。

(1) その理論体系を一応換骨脱胎して、研究者の視角から reformulate して独自の解釈と批判を展開する方法

(2) 原著の編別構成に忠実に従い、その理論体系を正確にフォローし乍ら解釈と批判を展開する方法

がすなわちそれである。ブロンフェンレンナー (M. Bronfenrenner) は、大担にも、利潤の分け前を横軸、粗投資を縦軸にとつた二次元平面上に資本の供給函数と需要函数をプロットしたところの、「Robinsonian cross」によつてロビンソンの資本蓄積論を reformulate せんと試みてゐるが、これなどはさしづめ(1)の方法の典型と考へられるであらう。ブロンフェンレンナーのいわゆる「Robinsonian cross」が正しいかどうか大いに問題の存するところであつて、筆者は必ずしも正しいとは思われないが、ロビンソンの資本蓄積論のように、多くの誤謬と混乱を含む「偉大なる失敗作」の長所と短所

三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』（柴山）

とを選別するのには(1)の方法が案外効果的であるかもしれない。しかし三谷教授は(2)の方法を採用され、本論ではロビンソンの *The Accumulation of Capital* の編別構成を忠実にフォローし乍ら各章ごとに解釈と批判を展開しておられる。なお経済学史を専攻された三谷教授としては、ロビンソンが資本蓄積論を展開するに至つた学史的背景に多くの興味を感ぜられたのであろう。緒論とはいえ、ほとんど半分の紙面をさいて、資本蓄積論に至るまでのロビンソンの理論の展開過程をあとづけておられる。

(1) J. Robinson ; *An Essay on Marxian Economics*.  
p. 95

(2) A. P. Lerner, "The Accumulation of Capital. by  
J. Robinson" *American Economic Review*, September 1957, p. 699.

(3) 三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』二ページ。

(4) M. Bronfenbrenner, "Academic Methods for  
Marxian Problems" *The Journal of Political  
Economy*, pp. 535—542.

一〇四

一一

前節でもふれた如く、三谷教授の『ロビンソン資本蓄積論の研究』は二つの部分より成る。一つは動態理論的研究と題された緒論であり、二は資本蓄積論と題された本論である。

ロビンソンの研究歴は「第一、一九三三年に『不完全競争の経済学』を公にするにいたるまでの時期、第二、そのころから、ケインズ『一般理論』の出版をへてこの理論の普及とその拡充、とくにその（静学的）長期化に努力した時期、第三に、その後、マルクス経済学の研究をふくむ動態理論的研究をおこなつて、経済発展の理論（資本蓄積の理論）の確立に努力した時期」の三つの時期に区別されると考えられる三谷教授は、<sup>(一)</sup> 緒論動態理論的研究において、この三つの時期を通じてのロビンソンの研究歴について学史的展開される。すなわちその第一章序論において、第一及び第二の時期すなわち『不完全競争』の経済学の出版を通じて、ゼロの純投資という長期均衡における雇用水準の決定機構を説明するという形で雇用理論の長期化に努力した時期までの極めて簡単な概況が与えられ、第二章マルクス研究において、*An Essay on Marxian Economics* において展開されているロビンソンのマルクス理解の程度がか

なり詳細に検討批判され、第三章恒常的蓄積において、ロビンソンが *The Rate of Interest and other Essays* の中の一論文 “The Generalisation of the General Theory” にあつて展開している恒常的蓄積のモデルが簡単に検討され、最後の第四章生産函数と資本理論において、ロビンソンが “The Production Function and the Theory of Capital” なる論文<sup>(2)</sup>にあつて展開している独自の生産函数論がかなり詳細に紹介されてゐる。

本論資本蓄積論において、ロビンソンの *The Accumulation of Capital* の主要部分を占める長期蓄積論と短期理論の一部分が詳細に検討批判されているのであるが、検討批判はロビンソンの原著の編別構成に忠実に則して乍ら展開される。すなわち第二章長期蓄積(一)―主題と方法―は原著の第7章 *A Simple Model* の要約であり、第三章長期蓄積(二)―単一の技術での蓄積―は原著第8章 *Accumulation with Constant Technique* 及び第9章 *Technical Progress* の要約と批判であり、第四章長期蓄積(三)―技術的フロンティアと蓄積は原著第二部 *The Technical Frontier* (第10章 *The Spectrum of Techniques* 第11章 *The Evaluation of Capital*, 第12章 *The Technical Frontier in a Golden Age*, 第13章 *Productivity and the Real*

*Capital Ratio*, 第14章 *Accumulation without Inventions*, 第15章 *A Surplus of Labour*) の紹介と批判であり、第五章長期蓄積(四)―技術進歩と蓄積―は原著第三部 *Accumulation and Technical Progress* (第16章 *Accumulation with Neutral Technical Progress*, 第17章 *Accumulation with Biased Progress*) の要約であり、第六章短期では原著第9章 *Prices and Profits*, 第21章 *Fluctuations in the Rate of Investment* の所説が紹介されている。そして最後の第七章結論にかえて、において三谷教授はロビンソンの長期停滞理論を検討しておられる。三谷教授のロビンソンへの密着は編別構成の忠実な祖述だけには止まらず、過度にも思われる引用を結果している。すなわち、できる限り原著者ロビンソンをして語らしめようとの意図でもあろうか、原著からの引用句の間に注釈ないし批判を挿入するといふスタイルを殆んど首尾一貫して採用しておられる。そのため、引用句と三谷教授自身の文章とを比較したならば恐らく引用句のほうが多くなっているのではないかと思われるほどである。このような表現スタイルは一見安易な方法のように見えるのではない。原著者の理論を十分に理解した上でなければ、適当な文章を適所に抜き出すことができないからで

ある。この点では三谷教授は成功しておられるように思う。なおこのような表現スタイルは一見したところ原著者の真意を最も忠実に伝える方法であるかの如くに見えて案外そうではない。全体の一部分を誤つた形で抽出することによつて原著者の真意を歪曲する危険が存在するのみならず、原著者に余りに密着することによつて、木を見て森を見ざるの誤りを犯す危険もまた存在しうるからである。ロビンソンの *The Accumulation of Capital* の如く「誤譯と混乱を内包する偉大な失敗作」の場合には、ことにこの種の危険性が多いと考えられる。

三谷教授のこの労作を精読する読者が、右の表現スタイルのゆえに三谷教授の学識と努力に拘らず、ついにロビンソンの資本蓄積論の全体系を把握することに困難を感ぜられるようなことが万一にもなきやをおそれるものである。この意味において、編別構成を追つた紹介批判の外に、ロビンソンの資本蓄積論の核心について三谷教授の文章をもつて、今少し掘り下げた分析が与えられていたならば、一層価値ある貴重な研究文献となつたであろうとおしまれる。以上は表現スタイルについての若干の感想であるが、次に三谷教授のロビンソン批判について若干の問題点を思いつくまゝに述べることにしよう。

(1) 三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』一四八—一五〇。

(2) *Review of Economic Studies*, Vol. XXI (2), No. 55.

## 三

三谷教授は第二章マルクス研究において、ロビンソンのマルクス研究を紹介するとともに彼女のマルクス批判に反批判を展開しておられるのであるが、そのうち疑問に思われる点を一、二指摘したい。

労働力の価値に関して三谷教授の所説を先づ引用しよう。

「さてつぎにロビンソンの労働力の価値にかんする議論をみるに、彼女はある脚註においてつぎのように書いている。『マルクスの最初の賃銀理論の方式化はまったく独断的なものである。労働力は、他の商品のように、その価値において売られるかたむきがある。そして、労働力の価値は、労働者とかれらとつてかわる子供の生存資料を生産するに必要な労働時間である。この生存費水準は『歴史のおよび精神的要素』をふくんでいる。なぜなれば、それは一部分は『自由労働者の階級が形成されたときの習慣や快適の程度』に、すなわち、資本主義が小

農民を収奪し、『自由労働者』にしてしまふ以前におこなわれていた生活標準に依存しているからである。……マルクスが生存費賃銀の決定における『歴史のおよび精神的』要素に言及していることは、労働〔力〕の価値が資本主義の発展にともない慣例的な生活水準とともに上昇する傾向があるという意味にしばしば解釈される。わたくしはこのような解釈にたいするいかなる根拠をもみいださない。そしてもしもこの解釈が採用されるならば、それはマルクスの議論を循環論法におとし入れてしまふ。なぜならば、それは実質賃銀が労働力の価値を決定するということを意味するからである。』すなわち、ロビンソンによれば、マルクスは、労働力の価値が「歴史のおよび精神的」要素にも依存することをみとめているが、しかし労働力の価値が資本主義の発展にともない上昇するものと解釈することはできないというのである。だから、「自由労働者の階級が形成されたときの慣習や快適の程度」に依存する労働力の価値がずつとつづくものとみなされる。<sup>(1)</sup>以上の文章によつてロビンソンの所説の紹介を終り、つづいてそのロビンソン説に対する反批判を展開されるのであるが、その論旨は「歴史のおよび精神的要素」を考慮するとき労働力の価値は資本主義の発展にともな

三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』（柴山）

い慣例的な生活標準とともに上昇する傾向があると解釈することとはマルクスの議論を循環論法におとしいれることがあるから、右の解釈は採用できないというのがロビンソンの意見であるが、マルクスの『資本論』や『賃銀、価格および利潤』などを読めば、右の解釈は許されるし、また右の解釈をしたからとて、マルクスの議論を循環論法におとしいれることにはならぬという点にある。すなわち三谷教授は『資本論』および『賃銀、価格および利潤』から必要な文章を引用された後に次の如くいつておられる。「かくてマルクスによれば、労働力の価値は変化しうるものであり、事情によつてはたかまるであらう。ロビンソンは、労働力の価値の上昇をみとめるときは、マルクスの議論は循環論法におちいるという。なぜならば、実質賃銀が労働力の価値を決定することになるからである。しかしそのときにも実質賃銀が労働力の価値を決定するわけではない。労働力の価値は生理的要素のほかに歴史的または社会的要素そのものによつてさだまるのである。」<sup>(2)</sup>

このように三谷教授は「労働力の価値が歴史的に上昇するか否か」についてのロビンソンの解釈のみを重点的にとりあげておられるのであるが、ロビンソンのマルクス賃銀論解釈はもつ

と広汎である。参考のためにその要点のみ摘記すると次の通りである。

(1) 実質賃銀は労働力の価値＝労働力の再生産に必要な労働時間によつて決まるといふマルクスの最初の定式化は独断論である。

(2) 右のような独断論的な賃銀決定理論は議論が進むにつれてマルクスによつて漸次放棄された。

(3) その結果マルクスの賃銀決定理論は次のようなものと解釈してもその真意を損はないだろう。

(a) 実質賃銀の下限は労働力の価値＝生存費水準によつて与えられ、その上限は生産力によつて決定される。<sup>(3)</sup>

(b) 右の上限と下限の間の何れに実質賃銀が決定されるかを決めるものは労働者階級と資本家階級の力関係である。<sup>(4)</sup>

(c) 労働者階級と資本家階級との力関係を決定するものは産業予備軍の増減である。ゆえに長期的には、実質賃銀水準を決定するものは産業予備軍の増減である。<sup>(5)</sup>

要するに現実の経済において変動する実質賃銀水準の決定機構を論理的に説明しうる賃銀理論をロビンソンは「資本論」に探求した。そして最初に見出したのが「労働力の価値」説であ

るが、「労働力の価値」を「歴史的および精神的」要素によつて上昇しうるものと解釈すれば、実質賃銀が「労働力の価値」の決定要因となり、結局、実質賃銀を説明すべき「労働力の価値」が実質賃銀によつて決定されることになり、循環論法に陥るから、「労働力の価値」は生理的生産水準説的に解釈せざるをえない。「労働力の価値」をそのように解釈すれば現実の実質賃銀の変動過程を説明しえないから、「労働力の価値」説は独断論であるとロビンソンは判断したのである。そして『資本論』の他の箇所に散見される「産業予備軍の循環」説的なマルクスの賃銀理論をアプリーシェイトしているわけである。

かかる発想法は労働価値論を否定する近代経済学者に共通のものであつて、ベーム・バベルク及びロビンソン自身が労働価値論と価格論との有機的・立体的関係を見忘れて、両者の間の矛盾をつき労働価値論をすてて価格論のみをとるべきことを主張しているのと全く同様に、「労働力の価値」説的賃銀理論と「産業予備軍の循環」説的賃銀理論との有機的・立体的関係を理解せず「労働力の価値」説的賃銀理論を独断論なりとして批判し去り、「産業予備軍の循環」説的賃銀理論のみを温存すべきことを忠告しているわけである。

このような近代経済学者的な発想法を説得的にくつがえすために、労働価値論無用論を徹底的に批判し、労働価値論の経済学体系に占める重要な位置を強調することが必要であろう。

その用意なしに、たとえば現実の実質賃銀は、「労働力の価値」によつて決まる正常な実質賃銀水準の上下を、「産業予備軍の循環」によつて反映されるところの労働力の需給関係によつて循環運動するものであるというように解釈すれば、マルクスの「労働力の価値」説的賃銀理論と「産業予備軍の循環」説的賃銀理論とは矛盾なく併存しうると説いたところで、窮極においては「産業予備軍の循環」によつて反映される労働力の需要、供給が実質賃銀水準を決定するのならば、その労働力の需要、供給を決定する機構の解明にさかのればよいのであつて、「労働力の価値」という神秘的な概念をもちこむ必要がどこにあるのかという反論を招くだけかも知れないであろう。いわんや、三谷教授の如く、労働力の価値が「歴史のおよび精神的」要素によつて上昇しうる点を強調されるだけならば、実際には「産業予備軍の循環」に依じて「労働力の価値」の上下を振動する現実の実質賃銀の運動を「労働力の価値」のみによつて説明するのが唯一つのマルクス賃銀理論であるかの如き印象

三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』（柴山）

をロビンソンに与え、彼女の循環論説を改めさせるどころか逆に強める結果になりはしないかをおそれるものである。

またロビンソンはイギリスやスカンジナビア諸国のような先進資本主義諸国における実質賃銀水準の上昇という歴史的事実を根拠に労働者の絶対的窮乏化説を否定しているのであるが、三谷教授はこの点について次のように批判される。

「これによつてみれば、ロビンソンは実質賃銀の水準についてかかんがえ、資本主義諸国における労働者の実質賃銀水準の上昇をば理由として労働者の「窮乏化」を否定しているのである。しかし前述のように労働者の窮乏化は全体としての労働者階級の状態によつてしめされるのである。それはたんに実質賃銀の水準だけの問題ではない。またたとえ実質賃銀水準が上昇した事実があつても、このことによつてただちに労働者の窮乏化を否定することはできない。なぜならば、その上昇は実働力の価値の上昇におよばないかもしれないのであつて、その場合には窮乏化の事実が存在していることになるからである。かくてロビンソンの右の議論はあまりにも早急な結論にもつくものであるといふであらう。<sup>(6)</sup>」

たしかに三谷教授の指摘される通り、労働者の窮乏化か否か



を決定するものは実質賃銀水準だけではない。社会保障制度その他の要因も考慮しなければならない。その意味で「ロビンソンの右の議論はあまりにも早急な結論にもとづくものである。」との三谷教授のロビンソン批判は当つていふようにも思われるが、ロビンソンのあげているイギリスやスカンジナビア諸国は社会保障制度の最も進歩した国々である。したがつて「之等の先進資本主義諸国では実質賃銀水準だけではなく、全体として、労働者階級の状態もまた向上しているのだ」とのロビンソンの反論が予想される。この反論に対して三谷教授は如何に答えられるであろうか。

「しかしながら問題はけつしてそんなに簡単なものではない」のであつて三谷教授は「マルクスは『賃銀、価格および利潤』のなかで、労働者の窮乏化の事実として、賃銀の平均的標準がその最低限に低下するかたむきがあることを指摘している」<sup>(8)</sup>点を指摘されて、次の文章を引用しておられる。「近代産業の発展そのものが、ますます労働者にたいして資本家のほうに有利に形勢を決定せざるをえず、またその結果として、資本主義的生産の一般的傾向は、賃銀の平均的標準をたかめるのではなくてこれをひくめ、いいかえれば、労働(力)の価値を多かれ

すくなかれその最低限におしよけるにあるのである。」(『マルクス—エンゲルス選集』第十一巻、一〇二ページ)卒直にいつて筆者は、ここにわざわざ右のマルクスの文章を引用された三谷教授の真意を理解しえないことを告白せざるをえない。ロビンソンは実質賃銀低下即窮乏化説と理解し、これを否定するために先進資本主義国の実質賃銀上昇という歴史的現実を持ち出した。三谷教授はこのロビンソンの窮乏化否定説を否定して窮乏化説を肯定するために、実質賃銀低下即窮乏化説を批判し、実質賃銀が上昇しても窮乏化はありうるという説を展開された。これをマルクスの権威で裏づけるためならば、そのようなマルクスの文章を引用すべきである。しかるに逆にあたかも実質賃銀低下即窮乏化説を裏づけるかのような右のマルクスの文章を引用される。これではロビンソンの窮乏化否定説をよみがえらせることにならないだろうか。あるいは三谷教授の真意は、実質賃銀が上昇しても窮乏化は理論的にありうるけれども、現実の資本主義経済では実質賃銀も低下し窮乏化しつつあるということを指摘するにあつたのかも知れない。しかしそれならばマルクスの文章を引用するよりもむしろ歴史的事実を列挙すべきであつたらう。ロビンソンは事実をもつて窮乏化を否

定した。これを批判するためには窮乏化を実証する事実を指摘すべきである。狂信的なマルクス主義者には神秘的な効果をもつマルクスの文章も冷静な経済学者ロビンソンにはいささかの効果ももたないのではないだろうか。

- (1) 三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』四一—四二ページ。
- (2) 三谷友吉著、前掲書四三—四四ページ。
- (3) J. Robinson: *An Essay on Marxian Economics*, p. 31, p. 33.
- (4) J. Robinson, *op. cit.*, p. 30.
- (5) J. Robinson, *op. cit.*, p. 32.
- (6) 三谷友吉著、前掲書四八ページ。
- (7) 三谷友吉著、前掲書四八ページ。
- (8) 三谷友吉著、前掲書四八ページ。

#### 四

緒論第三章恒常的蓄積において三谷教授は、*The Accumulation of Capital* の原型とも見做せらるる *The Rate of Interest and other Essays* の一論文 “The Generalisation of the

三谷友吉著『ロビンソン資本蓄積論の研究』(柴山)

General Theory”でロビンソンが展開している恒常的蓄積モデルの概要を紹介された後に一つの疑問を提起される。「…ロビンソンは：『恒常的蓄積は労働の慢性的または漸増的失業をともなうかもしれない』ということをおべているのである。…これによつてみれば、ロビンソンは、恒常的蓄積が失業の発生または増加をともなうことがありうることをはつきりと指摘しているのである。しかしそうするとどうせんひとつの疑問がおこらざるをえないであろう。それは前述のような不変の利潤率のもとでの労働の生産性の増加にともなう実質賃銀の上昇とこの命題とあきらかに矛盾するのである。」<sup>(1)</sup>

たしかにこれは明らかな矛盾のように思われる。しかしここで注意せねばならないことはロビンソンの恒常的蓄積のモデルは「何らかの現実の経済に期待されるビヘイビア」に対応するものではなくて、それは一片の単純な数学以上の何ものでもなく<sup>(2)</sup>それが満足されれば資本設備の完全稼働が維持される諸条件を示すことによつて、「現実の経済が受けるであろうところの種々のタイプの攪乱を分類する」<sup>(3)</sup>ために構築されたモデルであるといふことである。したがつてこのモデルは5つの条件(1)技術的進歩の恒常的進行、(2)資本の懐妊期間の平均的不変、

(3)中立的技術進歩、(4)企業者間の競争による正常利潤率(設備の完全稼働を保証するという意味での)の確保、(5)貯蓄率の不変、が満たされるとき不変の利潤率のもとで労働生産性と実質賃銀と投資は恒常的に上昇し恒常的蓄積過程が進展しうること  
 は一つの数学的必然であることを含意するにすぎないのであつて、現実の経済に右の諸条件を満たす機構が内在するというようなことを意味するものでは決していない。ゆえにロビンソンの恒常的蓄積のモデルは、右の5つの条件が満たされたときに誘発される恒常的成長率 $\rightarrow$ 保証成長率が労働力の完全雇用を保証する自然成長率よりも低く、たとえば前者が2%後者が3%であるというような場合でもなおかつ、右の5つの条件が満たされるものとすれば現実成長率は保証成長率と等しく2%となり設備の完全稼働は保証されるけれども自然成長率3%には及ばないから失業が発生するということをしているのであるから、抽象的議論としては決して矛盾とはいえないであらう。現実の経済に失業の存在と実質賃銀の労働生産力と併行しての上昇との共存を保証するメカニズムが存在しうるかどうかは自から別個の問題である。しかればロビンソンは現実の経済において失業と実質賃銀の上昇とが共存しうると考えているであらう

か。ロビンソンによれば、この点は競争のメカニズム如何にかかつていることになるのであらうが、彼女は、「経済をブーム又はスランプの状況に追いやる諸種の影響」を論ずべき第6節 発展経済の変化において、次のような論理を展開している。

「産業予備軍の存在 $\downarrow$ 労働者の力関係の弱体化 $\downarrow$ 価格の貨幣賃銀に対する相対的優位 $\downarrow$ 資本節約的技術の採用 $\downarrow$ 産出物一単位の雇増大 $\downarrow$ 生産設備の遊休と産業予備軍の共存。」

この点より判断すればロビンソンが現実の経済には、つねに失業の存在と実質賃銀の労働生産性と併行しての上昇との共存を保証するような競争のメカニズムが存在すると考えていなかつたことだけはたしかである。

(1) 三谷友吉著、前掲書、一〇七ページ。

(2) J. Robinson; *The Rate of Interest and other Essays*, p. 96.

(3) *Ibid.*

(4) Cf. J. Robinson; *The Rate of Interest and other Essays*, pp. 108—9.

## 五

本論資本蓄積論において三谷教授はロビンソンの主著 *The*

*Accumulation of Capital* の主要部分の詳細な紹介と若干の疑問を与えておられる。その第三節循環と趨勢、において三谷教授は、ロビンソンの次の文章、「それにもかかわらず、蓄積は、企業者たちが活潑にそれを遂行するならば、可能である。

そして、蓄積が経済の潜在的成長率と歩調をあわせたり、それを追いこしたり、またはそれにおよばなかつたりすることに於いてのわれわれの分析は、それが循環的変動の諸表現に翻訳されるときにも、有効なのである。」<sup>(1)</sup>を引用されたのちに、次の如く批判される。

「ロビンソンは、長期蓄積の理論における『蓄積が経済の潜在的成長率と歩調をあわせたり、それを追いこしたり、またはそれにおよばなかつたりすることについてのわれわれの分析は、短期の理論における『循環的変動』の場合に翻訳しても有効であるとかんがえているのであるが、かならずしも、そうではないのである。ロビンソンの長期蓄積の理論のなかの過程分析的な議論によれば蓄積の上下運動は左のような図式的な関係によつてしめされる。すなわち、所与の人口増加率のもとにおいて、潜在的成長率が蓄積率よりも大きい↓労働過剰が生ずる↓実質賃銀率が低落し蓄積率が上昇し技術進歩率が減退する↓労働

働の過剰が消滅する↓蓄積率が潜在的成長率よりも大きくなる↓労働の不足が生ずる↓実質賃銀率が騰貴し蓄積率が低下し技術進歩率が増大する。しかし、短期の理論における循環的変動にかんする説明によれば、ブームが高水準の均衡点に到達するときに実質賃銀率は低落している。そして蓄積率は上昇していきながら、しかしそれにもかかわらず完全雇用の状態は成立していない。労働の過剰はまったく消滅しはしないのである。このような事態は右にあげた図式的な関係とあまりにもくいちがつているのであつて、この関係のしめす蓄積の上下運動のたんなる行きすぎとして理解することはできないのである。」<sup>(2)</sup>(傍点は筆者)

すなわち長期理論の過程分析的図式(三谷教授の理解された)と短期理論とは「あまりにもくいちがつている」ので、ロビンソンのいうように長期理論を短期理論に翻訳してもかならずしも有効であるとはいえないというのが三谷教授の論点である。しかしながらロビンソンはかならずしもつねに有効であると考えまたそういつているわけではない。もしそうであるとすれば、長期理論と短期理論とを区別して分析すること自体がナンセンスになるだろう。平穩(tranquility)の状態を前提する

長期理論と予想要因の変動と資本設備の不变を前提する短期理論とでは、その内容が異なるのはむしろ当然である。ロビンソンは「もし、企業者たちが活潑にそれ(蓄積)を遂行するならば、」有効である。といっているにすぎない。なお、ロビンソンがここでいっている蓄積はすべて趨勢としての長期的な蓄積の意味に解釈すべきであろう。すなわち景気循環過程をみれば不況には負の純投資がありうるけれども、それらをならして趨勢的にみれば資本蓄積が行なわれているという意味における蓄積である。そしてこのような意味での長期の資本蓄積は、企業者たちが活潑にそれを遂行するならば可能であり、またかかる趨勢的な資本蓄積過程の分析には長期理論の手法が利用しうるといのがロビンソンの真意ではなからうか。そうだとすれば短期の理論とくいちがうのはむしろ当然であろう。なおロビンソンの長期理論を三谷教授の図式のような過程分析的に翻訳することが果してロビンソンの真意に沿う所以であるかどうか、筆者は疑問をいだくものであることをここに付言したい。

最後に三谷教授は「結論にかえて」ロビンソンの停滞論を検討しておられるが、その中で、「ロビンソンは独占を促進する根本的な原因として長期的な利潤率の低下を重視している。」<sup>(3)</sup>

と解釈しておられる。筆者はこの解釈に疑問をいだくものである。なるほど三谷教授が引用しておられる如く、ロビンソンがそのような発言をしている箇所が見出される。しかし、それは経済至福 (Economic Bliss) へのアプローチが理論的には可能であつても資本主義のルール・オブ・ゲームの下では実現不可能であることを論証するために、経済至福へのアプローチ<sup>(4)</sup>利潤率の長期的な低下↓独占強化、なる論理を展開している箇所での発言であつて、現実の経済に利潤率の長期的な低下傾向があり、それが現実の独占強化の根本的な原因であるとの発言ではないことを注意すべきである。ロビンソンは利潤率の低下傾向の現実性を否定する立場に立っていることは *An Essay on Marxian Economics* によつても明らかであるが、もしロビンソンが本当に独占を促進する根本的原因は利潤率の長期的な低下であると考えていたとすれば、その根本的原因が現実の経済にはないのだから独占強化も存在しないことになり、ロビンソンの「独占の増大による停滞」論が停滞するという矛盾に陥るであろう。このように考えるならば、ロビンソンが独占を促進する根本的原因を利潤率の長期的な低下に求めているとの三谷教授の解釈にはどこか無理があるということにならないであら

うか。

以上思いつくままに若干の疑問を提出させていただいたが、あるいは浅学なる筆者の誤解にもとづく的を射ざる批判であるかもしれない。予め三谷教授の寛容をこう次第である。

最後に私事にわたるが、筆者自身は三谷教授の労作をロビンソンの原著と比較検討することによつて学びうるどころ大であったことを記し三谷教授に謝意を表わしてこの書評の結びとしたい。

(1) J. Robinson; *The Accumulation of Capital*, p. 213.

(2) 三谷友吉著、前掲書、三三〇ページ。

(3) 三谷友吉著、前掲書、三四八ページ。

(4) J. Robinson; *The Accumulation of Capital*, p. 219.